

公営住宅における身体障害者向け住宅の空間構成に関する研究 その2
—既存公営住宅の平面分析とモデル化—

公営住宅 障害者向け住戸 車いす
特目住宅

準会員 ○北村 晴香*
準会員 中 美咲子**
正会員 三島 幸子***
正会員 中園 真人****
正会員 孔 相権*****

1. はじめに

前報では、公営住宅における身体障害者向け住戸（以下：特殊設計住戸）の整備状況、住戸及び(L)DKの面積の関係から現在の公営住宅の特殊設計住戸の実態を明らかにした。本報では、(L)DKの面積の差による平面構成の違いについて明らかにし、住戸平面の分類からみた既往研究との差を明らかにすることを目的とする。

2. (L)DKの面積からみた住戸について

前編では住戸の延べ床面積と(L)DKの面積との関係についての考察を行った。本編では、(L)DKの面積規模の差による、住戸型と居室について分析を行う。

2.1 (L)DKの面積が20㎡~30㎡

(L)DKの面積が20㎡~30㎡となるのは既往研究では3例しかなかったが、面積水準が向上したことによって、46例に増加した。(L)DKの面積について分析を行っていたので、面積の広いLDK型の方が多い。特に、単身世帯向けの住戸は居室が1つであるため、(L)DKの面積が大きいと考えられる。

2.2 (L)DKの面積が10㎡~20㎡

既往研究のほとんどの(L)DKの面積が10㎡~20㎡であり、本調査にて収集した半数以上がこちらに分類される。その中で最も多いのは2DK型であるが、2DK型は延べ床面積が40㎡に満たないものから、90㎡を上回るものまで多岐にわたる。延べ床面積が90㎡をこえる2DK型はDKの面積を抑えることで他の居室空間などを広くとることができる。

2.3 (L)DKとその他の空間

(L)DKの面積がある程度固定されているので、延べ床面積は(L)DK以外の空間に影響を与える。公営住宅など、集合住宅ではスパン割が固定されるため、上下階で延べ床面積が大きく変化することはない。つまり居室、サニタリーの取り方によって住戸型が変化すると考えられる。

3. 住戸平面の分類

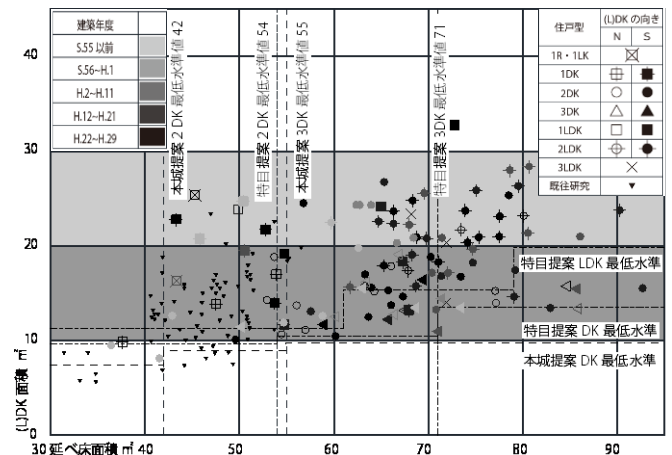


図1 住戸及び(L)DKの規模

3.1 分類について

本研究では、収集した125プランについて以下のように定義^{注1)}、分類した。

- ① 主室：車いす使用者が使用する居室、又は(L)DKに最も近接している居室
- ② 連続：居室間の建具が引戸である
- ③ 不連続：②でない場合、又は居室間が廊下によって繋がっている
- ④ (L)DK独立：(L)DKと居室の間との移動に廊下を通る

以上の定義に従って平面の分類を行ったものが、表1及び表2である^{注2)}。

既往研究と比較すると1R、1LKなど今回新たに分類された型も確認されたがほとんどは既報の従来型であった。単身世帯向け住戸が増加したのは、障害者や高齢者が単身でも公営住宅に入居できるようになったことや時代的に単身世帯が増加したことが要因と考えられる。つまり設計の考え方についてはあまり変化していないと思われる。したがって住み方調査などを行い、現在の生活様式にかなった計画なのか、今後調査する必要がある。

3.2 住戸型について

本調査にて最も多かった型はDK型、LDK型共に(L)DKが南で主室が洋室、居室間が不連続の2DK型、

表 1 DK 型及び単身者向け住戸平面の分類

		DK 型			
住戸型	DK-主室	DK 南		DK 北	
		主室-居室	主室-居室 (主室・居室)	主室-居室	主室-居室 (主室・居室)
2DK	DK-洋	(1)	(2)	(7) (8)	(6) (1) (1)
	DK-和	(3) (2)	(5) (2)	(3) (2)	(1)
	DK 独立	(6)			
3DK	DK-洋	(1) (1)	(2) (1DK) (10)	(1) (3)	(1) (1)
	DK-和		(2)	(1)	(1) (1)
	DK 独立	(1) (1)	凡例 : 連続 : (L)DK : 不連続 [主] : 主室 □ : 居室 ▽ : 車いす出入り可 ○ : サニタリー	(2) (1)	(2) (1)

表 2 LDK 型住戸平面の分類

		LDK 型			
住戸型	DK-主室	LDK 南		LDK 北	
		主室-居室	主室-居室 (主室・居室)	主室-居室	主室-居室 (主室・居室)
LDK	LDK-洋	(1) 3LDK	(10) (9)	(2) (1)	(1) (1) 1LDK (2)
	LDK-和		(2) (10)	(1) 3LDK	(1) (1)
	LDK 独立	(1) 2LDK	(2) (1) 1LDK (1)	凡例 : 連続 : (L)DK : 不連続 [主] : 主室 □ : 居室 ▽ : 車いす出入り可 ○ : サニタリー	

2LDK型であり、それぞれ15プラン、19プランである。また、既往研究ではあまりみられず、3DKのDK北向きが多くみられた。これは、以前は1階張り出し型で南入りが多く、居室も南に配置するためDKを北に配置するという考え方が今も変わってないと思われる。

4. 事例分析

典型的な事例と既往研究で見られなかった事例について詳しく考察していく。

① 事例1 2DK

PLAN51は本調査において、DK型で最も多く見られた平面構成である。延べ床面積は本調査で得られた2DKの平均である65.9㎡に近似している。この値は特目提案の最低水準を優に上回っており、面積水準の向上が見てとれる。住棟形式は共用廊下型で1階に位置し、ほぼ北からの平入アプローチがとなっている。玄関には車いすを収納することができる物入れがあり、収納に関する配慮がうかがえる。廊下から洋室1を通りDK、そして洋室2へと続く動線となっている。DKの面積は各洋室とほぼ同

規模の12.5㎡あることから、このPLAN51は居室の面積をとることを優先していることが考えられる。サニタリーは車いす使用者がぎりぎり回転することができる広さであることから、広い居室を優先して計画したことが考えられる。

② 事例2 2DK

PLAN10は、PLAN51と同じく2DK型で延べ床面積も64.9㎡とPLAN51と近似しているが、DKの面積が24.2㎡とPLAN51の約2倍の広さとなっている。住棟形式は階段室型で1階に位置する。階段室が北向きのため、北妻入りアプローチとなる。このPLAN10はDKを南向きにかかなり広くとっているため、居室は2室とも北側に取られている。2室は約4畳半と約6畳とPLAN51の2室の居室に比べ、やや狭くなっている。サニタリーをコンパクトにまとめられていることから、DKが優先して取られたと考えられる。

③ 事例3 2LDK

PLAN62は本調査にて収集した2LDK型で最も多く見られた型である。共用廊下型の1階に位置し、北平入アプ

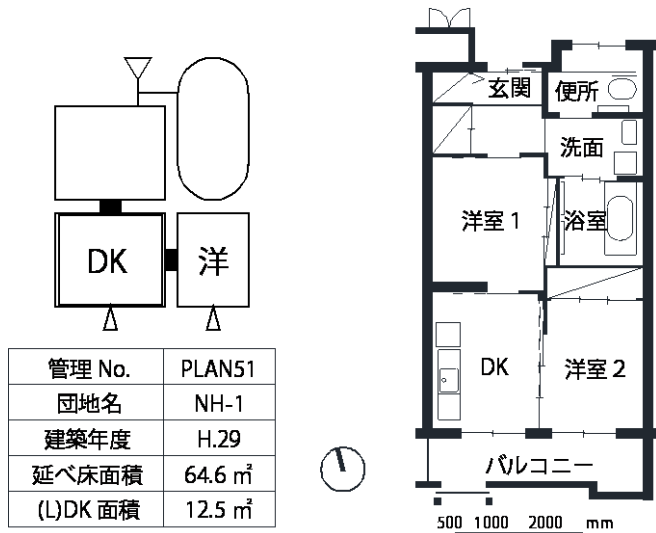


図2 事例1のモデル図及び平面図

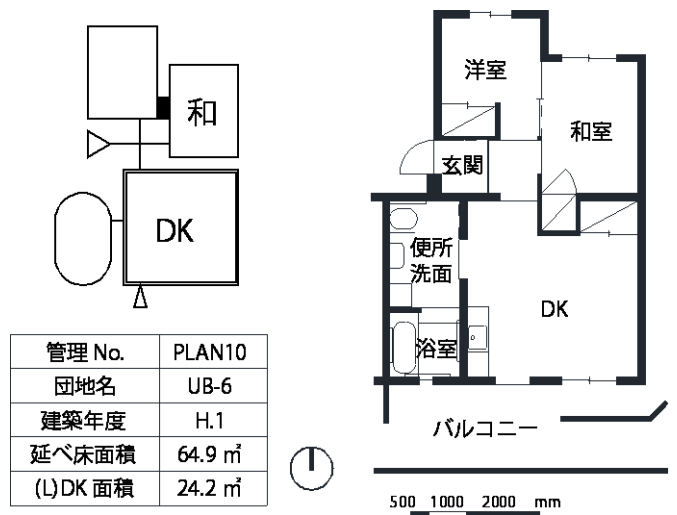


図3 事例2のモデル図及び平面図

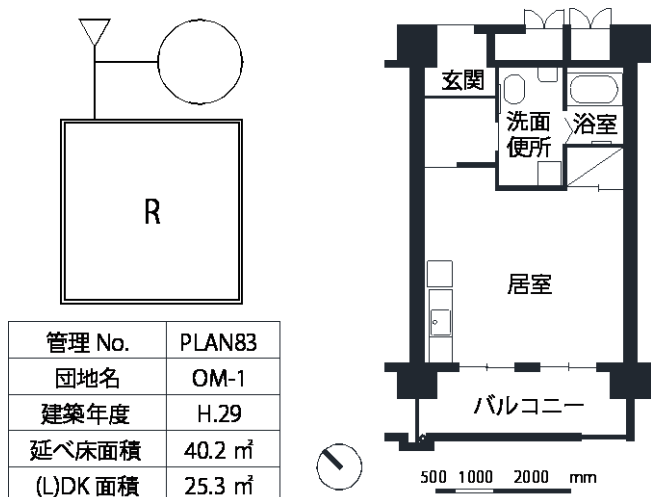


図4 事例3のモデル図及び平面図

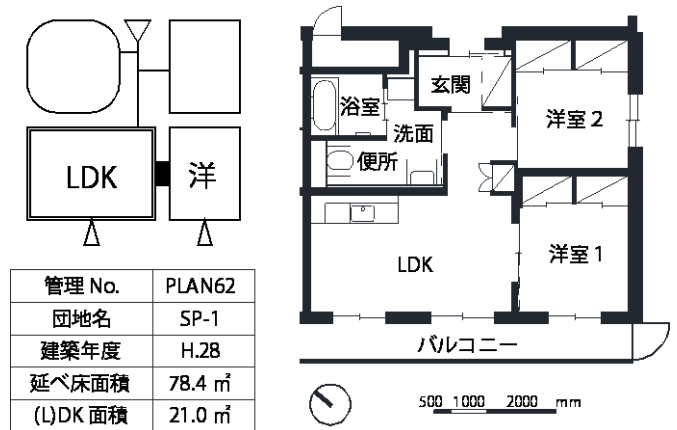


図5 事例4のモデル図及び平面図

ローチをとる。延べ床面積、(L)DK の面積共に前に紹介した 2DK 型よりも広がっている。この PLAN62 は前の 2DK 型よりも玄関や廊下が広めにとられているが、サンタリーは車いすでぎりぎり回転できる広さしか取られていない。このことから、LDK や居室の規模を優先して配置したことで、サンタリーについては比較的軽視した計画であることがうかがえる。

④事例 4 1R

PLAN83 は、本調査にて新たにでてきた単身者向け住戸の 1R 型である。居室に台所もあり、1人で暮らすには十分な広さがある。サンタリーもコンパクトにまとまっており、1人暮らし向きの平面構成である。共用廊下型の 1階に位置し、北平入りアプローチをとる。

以上のことから、平面構成の考え方としては、アプローチやサンタリーを北側に配置し、(L)DK を南に配置することが一般的な配置であることがわかる。(L)DK の規模と居室の規模については、車いす使用者が日中(L)DK で過ごすのか、主室で過ごすのかの考え方の差によって異なると考えられる。

5. まとめ

本報では、(L)DK の面積の差による平面構成の違いについて明らかにした。また、住戸平面の分類からみた既往研究との差異についても明らかにした。得られた知見は以下の通りである。

- 1) (L)DK の面積は大きく分けて、10 m²~20 m²と 20 m²~30 m²の 2 つに分類することができる。前者は既往研究時と類似の値である。このことから延べ床面積の増加には、(L)DK の面積を増加させたものと(L)DK 以外の居室やサンタリー等の面積を増加させたものの 2 つの場合があると考えられる。
- 2) (L)DK の面積などは特目住宅の最低水準値等が定められていることから、延べ床面積から考えると居室やサンタリーの配置の仕方によって住戸型が変化すると考えられる。
- 3) 高齢者や障害者が単身でも公営住宅に入居することができるようになったことや、単身世帯が増加していることから、既往研究ではみられなかった単身向け住戸型が増加したと考えられる。
- 4) 本調査において最も多かった型は DK 型、LDK 型ともに(L)DK が南で主室が洋室、居室間が不連続の 2(L)DK 型である。
- 5) 既往研究では少なかった 3DK 型の DK 北向きが増加していた。これは平面計画の考え方が変化していないことが考えられる。

以上のことから、(L)DK の面積が居室やサンタリーの配置、平面構成に影響していると考えられる。また、住戸平面の分類はほとんどが既往研究でみられた従来型であったことから、平面計画の根本的な考え方は変化していないと思われる。

本調査は、山口県以外の自治体から最新の 1 事例について調査したため、最新の傾向を示すことができたと考ええる。しかし公営住宅のストックの多さから今後、公営住宅の特目住宅を増やしていくには、改修された事例について調査していくことが必要であると考ええる。

注釈

注 1) 既往研究において、片岡らは主室を「団らんが行われ又発展する可能性の最も高い居室とする」と定義していたが、本調査においては平面図面のみでの判断となるため、新たに定義した。それに伴い、居室間の連続や不連続についても定義している。

注 2) 表 1 及び表 2 内のかっこ内の数字は本調査において得られたプラン数を示している。

参考文献

- 1) 片岡正喜、古賀唯夫、村上良知：身体障害者向け特目住宅の住空間構成に関する研究 (その 1) 住戸水準及び住戸の平面構成の傾向、日本建築学会論文報告集、No.271、pp.75-84、1978.9
- 2) 片岡正喜、古賀唯夫、村上良知：身体障害者向け特目住宅の住空間構成に関する研究 (その 2) 住戸の平面構成からみた評価、日本建築学会論文報告集、No.272、pp.105-114、1978.10
- 3) 古賀唯夫、片岡正喜、村上良知：身体障害者向け特目住宅の住空間構成に関する研究 (その 3) 身体障害者の動作特性からみたサンタリールームの評価、日本建築学会論文報告集、No.273、pp.79-87、1978.11
- 4) 片岡正喜、村上良知：身体障害者向け特目住宅の住空間構成に関する研究 (その 4) 代表住戸およびその居住者の特性と基本的住行為の傾向、日本建築学会論文報告集、No.274、pp.93-99、1978.12
- 5) 片岡正喜、村上良知：身体障害者向け特目住宅の住空間構成に関する研究 (その 5) 代表住戸の住み方からみた評価、日本建築学会論文報告集、No.275、pp.95-104、1979.1
- 6) 片岡正喜、村上良知：身体障害者向け特目住宅の住空間構成に関する研究 (その 6) KK 市 S 団地の住み方からみた評価及び住戸の設計計画指針、日本建築学会論文報告集、No.276、pp.115-122、1979.2
- 7) 特定目的公営住宅兼摂促進会議編：老人向け住宅の計画身体障害者向け住宅の計画、昭和 49 年 1 月

* 山口大学工学部感性デザイン工学科 学部生

** 山口大学工学部感性デザイン工学科 学部生

*** 山口大学大学院創成科学研究科 助教・博士 (工学)

**** 山口大学大学院創成科学研究科 教授・工博

***** 山口大学大学院創成科学研究科 講師・博士 (工学)

* Undergraduate, Dep. of KANSEI Design Eng., Faculty of Eng., Yamaguchi Univ.

** Undergraduate, Dep. of KANSEI Design Eng., Faculty of Eng., Yamaguchi Univ.

*** Assistant Prof., Graduate School of Science and Tec. for Innovation, Yamaguchi Univ., Dr. Eng.

**** Prof., Graduate School of Science and Tec. for Innovation, Yamaguchi Univ., Dr. Eng.

***** Lecturer, Graduate School of Science and Tec. for Innovation, Yamaguchi Univ., Dr. Eng.